

第四章 特別法要

親鸞聖人七百回御遠忌法要（一九七一年） 54

記念事業 本堂庫裏改修

親鸞聖人御誕生八百年 立教開宗七百五十年慶讃法要 並 58

住職継承法要（一九八八年）

記念事業 内陣莊嚴御修復

蓮如上人五百回御遠忌法要（一九九七年） 70

記念事業 本堂屋根大改修 庫裏改修

宗祖親鸞聖人・恵信尼公七百五十回御遠忌（二〇一九年） 79

記念事業 お待ち受け聞法会 他



昭和四十六（一九七二）年四月一日～五日

親鸞聖人七百回御遠忌

並びに 本堂庫裏改修工事

勝福寺の本堂は棟木の墨書から推測するに一七七一年に建立されたようです。その後、本堂は草葺きから瓦葺きに変わっています。庫裏については定かでないが百年以上は経っており、途中、平屋であったものを二階建てに改修しています。ひとこと言え、大変古い建物であったのですが、戦中戦後、修理もままならず荒れ果てたままでありました。

昭和四十六年、世の中も落ち着き、「親鸞聖人七百回御遠忌」の記念事業として、ようやく本堂・庫裏改修を行うことができました。そのときの慶びを第十七世住職が退任挨拶で次のように述べています。

その後、世の中も落ち着き、私も法務にいそしんで居りましたところ、昭和四十年より三力年で御門徒各位の御寄進により、戦時中に供出した仏具の再興となり、続いて、かねて念願の親鸞聖人七百回御遠忌法要の厳修と戦中、戦後の荒廃いちじるしい本堂・庫裏の修復を思い立ち、昭和四十六年四月には大法要を厳修することができました。その喜びは今に忘れることができません。

その当時の文章資料は残っていませんが、写真が残っていましたので、写真を通して御遠忌を振りかえってみることにします。

工事前の本堂



工事前の庫裏



改修を終えた本堂・庫裏





稚児行列



車社会でなかった当時、別院境内には桜など、庭木がたくさんありました。



第十七世 住職



楽人





参勤法中



献灯・献華・献香



住職挨拶



稚児集合

(四日市別院本堂階段)

当時の総代・婦人会の皆様



参勤くださった
法中の皆様



親戚一同



昭和六十（一九八五）年（昭和六十二（一九八七）年

親鸞聖人御誕生八百年
立教開宗七百五十年

慶讃法要

並びに

住職継承法要

記念事業 御本尊御修復・御内陣漆箔修復工事

第十七世住職、藤谷弘道は、いつのころからか、祖父が長く住職を務めたため父の代が短かったことを顧みて、六十歳で住職を引退すると決めていたようです。いよいよ六十歳が近づくと、最後の仕事として、年を経てくすんでしまっていた御莊嚴類の彩色をやらせて欲しいと、門信徒の皆様にお願ひしました。こうして始まったのが「親鸞聖人御生誕八百年 立教開宗七百五十年慶讃並びに住職継承」の記念事業としての本堂内陣の御莊嚴を一新する彩色工事であります。

趣意書

謹啓 向暑の砌 みざり 各位には益々御健勝にて、日々御法義御相続のことと拝察し、慶賀の至りに存じます。

さて、当勝福寺は、了山師による開基以来三百年、本尊に阿弥陀如来の秘仏を安置し、浄土真宗大谷派の九州地区塔頭とし

て、世々門信徒の尊崇を集め、その念仏の場となり、また心の安らぎの場ともなっており参りました。しかし、永い年月の重みには耐え得ず、内陣の損壊も著しく、全面的に修復を要する時機となりました。

このたび、昭和六十三年の春季を期して、宗祖親鸞聖人生誕八百年 立教開宗七百五十年の慶讃法要を厳修するに当り、併せて、第十七世住職 藤谷弘道の引退と第十八世知道 新住職の継承の法要を営むと共に、記念事業として御本尊阿弥陀如来像の御修

復並びに本堂御内陣と庫裏御内仏の塗箔修復工事に取りかかる運びとなりました。

このことは、その深大な意義と経費の高額なことに鑑み、住職と総代会とで慎重な審議を重ね、綿密な計画を立てて運営推進に当ることと致しました。

皆様方には、出費御多端の折、誠に恐縮ですが、如上の趣意に御賛同を賜わり、御門徒並びに一般御信徒の方々に浄財の御喜捨を仰ぎたく、茲に、事業計画書を添えて、衷心よりお願い申し上げます。

合 掌

昭和六十年七月

勝福寺 第十七世住職 藤谷弘道
門徒総代会長 佐々木宇喜盛
他 記念事業実行委員一同

（四日市地区委員）麻生史紀 大迫国光
中園武 中園静雄 幡手スエノ 粉一民
外園章 外園順一 峯馨 矢野矢
渡辺孝子 渡辺繁雄 渡辺文生 渡辺信雄
渡辺文太 渡辺美代子

（駅川地区委員）佐々木倉太 佐々木孝司
畑迫正一 藤本千之 本トヨカ 森若驍
矢次重義 山本裕敬 吉松君子
（院内地区委員）石川一之 尾山政夫
河野規 川面武夫 榎藤頭 向野一一
（三光地区委員）奥永始



漆も柱の金箔も剥げている



御 本 尊



修復前のお内陣

御本尊・御宮殿・須弥壇・欄間・御幕障子



お世話くださった総代さんたち





渡邊信雄さん・御宮殿の裏板に記念の墨書



御宮殿の屋根部分



御宮殿の組み立て



美しく塗り直されたお内陣

昭和六十三（一九八八）年四月一日～三日

親鸞聖人御生誕八百年
立教開宗七百五十年

慶讃法要

御案内

謹啓

陽気漸くあらたまるとき、貴家御一統様には、日々御法悦、愈々御清栄のことと拝察し、衷心よりお慶び申し上げます。

扱て、かねて趣意書をもって御案内申し上げました様に、当寺においては、宗祖御生誕八百年・立教開宗七百五十年の慶讃法要並びに住職継承法要を左記により厳修いたします。

惟うに、このたびの大法要は、「了山師開基以来三百年、門信徒の念仏の道場となってきた本堂内陣の御修復をも計り、本願聞信の機縁を深めよう」との志願からでした。この呼びかけに快く応じ、多額の御浄財をお寄せ下さった皆様方の尊い御厚志により、そのよろこびの時を迎えることが出来ました。深く謝意を捧げます。

いま、この勝縁に合わせただけの時を期し、さらに心を新たにして、御本尊の前に身を運び、静かに、宗祖のみ教えに耳を傾けたいと思います。そして、この尊い人生を生きていく意義を明らかにし、その道を見出していききたいと念願する次第です。またとないこの御法要に皆様お揃いでお参りし、御先祖の深い願いにも触れていただきたく、謹んで御案内申し上げます。

昭和六十三年二月十五日

響流山勝福寺住職 藤谷弘道

慶讃法要委員長 佐々木宇喜盛

他 法要委員一同

門信徒各位





献灯・献華・献香



献灯・献華・献香



ていぎ ちごぎょうれつ
庭儀 (稚児行列)



稚児宿になった四日市別院本堂にて、庭儀出発前のお勤め



四日市の町中を進む稚児行列



横町を進む稚児行列



稚児行列の出発



昭和六十三年（一九八八年）四月四日

住職継承法要

第十七世 釋弘道 退任敬白文



敬 白

敬つて三佛賢聖、照臨の影前に白す。
本日ここに住職退任法要を厳修することを得たるは大いなる慶びであります。

顧みれば、昭和十五年、小学六年の時に母が病に倒れ、その直後に前々住の祖父の死去、またその後数ヶ月にして祖母の死去にあい、以来、姉と弟の三人で力を合わせ、学業のかたわら家事を手伝い、中学を卒業

しました。

昭和二十年七月、招集を受け、八月敗戦、九月に復員して、三ヶ月後の十二月末に前任職の父を失いました。

翌年二月得度、未成年なれど勝福寺の法務に従事することになりました。

五月には姉の急逝で、病氣の母と兄弟二人の生活となったため、御門徒の勧めをいただいて、二十二年六月に結婚。翌年、長男知道が誕生しましたが、それを喜んでくれた母、並びに弟も三ヶ月後の九月には相次いで死去。こうして八年の間に六人の肉親と死別して独り寺に取り残された私の心境は、どうてい言葉では言い尽くせないもので御座居ました。その精神的な闇を抱え、また人間として生きていく方向を見出せず、随分と迷い、法務をおろそかにし、御門徒の皆様方に御心配、御迷惑をおかけした事は慚愧の限りで、ここに深くお詫び申し上げます。

その後、世の中も落ち着き、私も法務にこそしんで居りましたところ、昭和四十年より三力年で御門徒各位の御寄進により、戦時中に供出した仏具の再興となり、続いて、かねて念願の親鸞聖人七百回御遠忌法要の厳修と戦中、戦後の荒廃いちじるしい本堂、庫裏の修復を思い立ち、昭和四十六年四月には大法要を厳修することができま

した。その喜びは今に忘れることができません。

以来、今日まで十七年間、幸いに健康にも恵まれ法務一筋に勤めて参りましたが、その間、お月忌を縁として御門徒の方々との交流は、私にとってかけがえのない生き甲斐であり、また寺に生まれた者でなければ味わうことのできない幸せと感じております。

三年前、若院が京都より帰り法務にたずさわるようになりましたので、三年後の引退を考え、親鸞聖人生誕八百年、立教開宗七百五十年の慶讃法要を厳修し、記念事業として本堂の彩色工事いたしたき旨を総代、御門徒各位にお願い致しましたところ皆様方の御賛同を頂くことができました。

昭和六十年一月より取り掛かり昨六十二年十二月に完成、本日この法要を営む運びとなりましたことは、私の生涯にこの上ない喜びでありますと共に、これを以て心おきなく退任することができまことは誠に感謝にたえません。

爾今以後、新住職を助け、仏祖の示教を聞信敬仰し、静かなる報恩の行業をはたしたく思うものであります。

伏して、乞う。

佛祖、照覧し、哀愍攝受したまへ。

昭和六十三年四月四日

勝福寺第十七世住職 釋弘道

第十八世 釋知道 就任表白文



表 白

本日ここに、私、釋知道は、内外の因縁の熟し来たるところに押し出されて、勝福寺第十八世住職に就任いたしますことを、阿弥陀如来並びに宗祖親鸞聖人の両尊前にお誓い申し上げます。

かえりみれば、いのちを賜りて三十余年、驕りたかぶりたる自我意識を恥じることなく、わが出自を恨み、世間を軽蔑して生きてきました。しかし、そんな私にもかかわらず、はるかに深く張り巡らされていた仏縁に育まれて、今日どうやら、五逆謗法の徒とはこの私であると、かすかに思えるようになりました。

賜りたるいのち、

いのちと共にたまわりたるご縁の人々、
ご縁の世界、
そこに含まれている限りなき豊かさ、
みずみずしさ

それらのことにかすかに想い到るようになった今、それらの当体である阿弥陀如来に南無したてまつることの歓びを少しばかり味わえるようになりました。

ご縁の深さにくらべ、内に熟するもののおおか細きことではありますが、これから南無阿弥陀仏と念仏申しつつ、如来のお育てを日々新たに受けて、この勝福寺がいよいよ如来の恩徳を讃嘆する僧伽になつていくよう、有縁の皆様と共に歩んで参ることを誓います。

一九八八年四月四日

勝福寺第十八世住職 釋知道

敬つて白す



住職補任状伝達



引退挨拶



御盡力下さった総代の皆様



婦人会の皆様



平成六（一九九四）年～平成八（一九九六）年

蓮如上人五百回御遠忌法要

記念事業 勝福寺本堂庫裏大改修工事

平成三（一九九一）年九月二十七日、長崎に上陸した台風十九号は、九州北部地方に甚大な被害をもたらしました。江戸時代に建てられた勝福寺の本堂・庫裏もまた強風に耐えきれず、瓦が飛ばされるなどして、抜本的な修理が必要になりました。しかし、三年前に住職を継承したばかりの私たちは途方に暮れるばかりでしたが、総代さんをはじめご門徒の皆様さんからの力強い後押しがあり、思い切って平成の大改修に踏み切ることになりました。

趣意書

謹啓 皆様方におかれましては益々御健勝にて日々御法義御相続のこととお慶び申し上げます。

さて当寺は、今から四百年前真勝寺（現・東別院）を開いた専誉上人（渡辺蔵人統綱）の弟子・良珍を開基とし、長い間、九州御坊の塔頭として九州一円の大谷派の寺々を監督してまいりました。

また、いかなる因縁によるのか定かではありませんが、私共がご先祖より受け継ぎお参りしてきた当寺の御本尊は、それより更に三百年程さかのぼった鎌倉初期の阿弥陀如来像であります。

その御本尊を安置してきた当寺の本堂は、三百五十年前、山本、常德などを転々とした後に、真勝寺ともども現在地に建立されました。爾来、東別院が焼き打ちにされた御許山騒動の兵火にも免れ、ある時は草葺きを瓦葺きに改築し、ある時は本堂と庫裏の間にお内仏の間を増築したりしながら、門信徒の道場として今日まで大切に護持されてきました。

しかし、永年の風雪に建物の傷みは進み、抜本的な改修の時が迫ってきておりましたが、三年前の台風十七号・十九号、昨年の台風十三号と度重なる風水害によって、本堂・庫裏の屋根の損壊がこのほど進みました。あるいは大修理の時機が熟したの

かもしれません。ここに総代会を開き、皆さんに計ったところ、力を合わせて取り組もうとのご決議を頂きました。

私共としましても、皆様方のお力添えを受けながら、前住職から始まった昭和の大修理を引き継いで平成の大修理を完成させるべく微力を尽くす所存であります。

皆様方におかれましては、出費多端の折、誠に恐縮でございますが、この趣旨に御賛同いただき、仏法領への心からなる布施を行じて下さいますようお願い申し上げます。

平成六年十一月

勝福寺第十八世住職 藤谷知道

前住職 藤谷弘道

勝福寺門徒総代会長 外園章

（四日市地区総代） 麻生史紀 大迫国光 中園静雄

中園武 幡手スエノ 粉一民 外園章 外園淳

外園正久 前田隆三 渡辺孝純 渡辺正綱

渡辺ミツル 渡辺元義 渡辺文生（顧問）

（豊川地区総代） 小川春海 佐々木孝司 渡来秀利

藤本千之 矢次重義 山本裕敬 吉松君子

吉松忠徳 畑迫正一（顧問）

（院内地区総代） 石川十三男 尾山政夫 河野尚之

川面一男 権藤頭 向野茂 向野一（顧問）

（その他） 奥永始（深水）峯馨（乙女）

渡辺正民（中津）

○経緯

平成三年九月 台風十九号で本堂と庫裏の屋根などが甚大な被害を受ける。

平成六年七月 臨時総代会で本堂、庫裏改修を決定

平成六年九月～十二月 庫裏改修工事（田中工務店）

平成六年十一月 趣意書ができ、総代が十一月に地区説明会を実施

平成七年三月二十四日 本契約（大和社寺工営、麻生工務店、宇佐瓦センター）

平成八年一月二十五、二十六日 御本尊移動、仏具移動、養生工事

平成八年二月一日 本堂屋根大修理にかかる。

平成八年十一月二十日 御本尊遷座式

平成八年十一月二十五日 工事竣工

平成八年十一月二十六～二十七日

蓮如上人五百回忌御遠忌お待ち受け法要

平成九年十月十八日～十九日

蓮如上人五百回忌御遠忌法要

本堂庫裏改修落慶法要

記念式典、稚児行列

平成九年十一月二十八日

響流山勝福寺本堂庫裏改修事業会計報告

写真でたどる本堂大修理の経緯



平成3年9月 台風19号による被害の様子



破損状況の確認



役員会の様子



倒壊した四日市別院の鐘楼





屋根瓦が全部剥がれる



改修前の本堂



屋根瓦を取り除く



旧 鬼 瓦



仮屋根設置作業



仮 屋 根



屋根の向きが変わりました



棟上げ（小役丸工務店）



この瓦が葺かれます



瓦を葺く準備が出来上がる



本堂屋根に聳える獅子口(鬼瓦)



宇佐瓦の職人さん





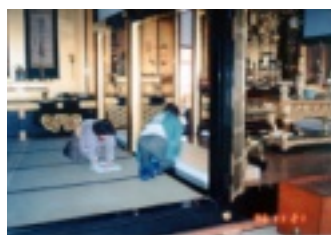
望月板金工作所
銅製の樋設置



小役丸棟梁



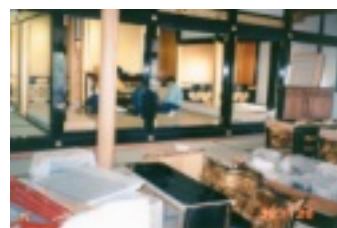
破風板の取り付け



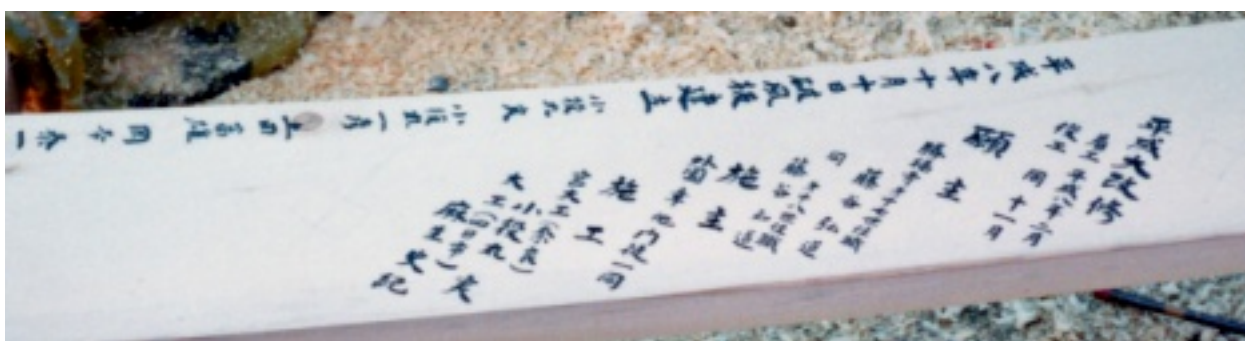
嬉しい大掃除



後列右の五人が本堂工事を施工した大工さん



仏具が帰ってきました



破風板の裏に墨書



見事にでき上がった本堂



平成九年十月十八日、十九日

蓮如上人五百回御遠忌法要



挨拶

響流山勝福寺住職 釋知道

澄み渡る秋の青空に、よそおいを一新してすつくとたたずむ響流山勝福寺、その真新しき覺のもと、有縁の御同行とともに、本日こうして落慶法要を厳修できますことは、このうえなき慶びであります。

これもひとえに、皆様方の仏法護持の御志によるものと、厚く感謝申し上げます。

相田みつをさんに「自分の番」と題する次のような詩があります。

生まれかわり死にかわり
永遠の過去のいのちを受けついで
いま自分の番を生きている

それがあなたのいのちです
それがわたしのいのちです

わたしのいのち、あなたのいのちは、生まれ変わり死に変わりしていく無常のいのちなのだが、それはそのまま永遠のいのちの（すがた）でもあるといふのです。無常の底に永遠を見いだし、地獄の底に極楽を開く、仏法もまた永遠の真理であります。

お寺は「私のお寺」でも「あなたのお寺」でもありません。永遠のいのちに
出遇うところにして一切衆生に開かれ、
未代に受け継いでいかねばならぬ大切な道場であります。

願わくは、このたびの大改修を起点として、共に浄土往生の道を歩んで参りたいものと念願してやみません。

南無阿弥陀仏



屋根裏に取り付けられた棟板



十月十八日

蓮如上人五百回御遠忌法要

十一時半 お斎

十三時 御遠忌法要 勤行

十四時 記念法話 松本梶丸先生
「一念の信心」

十月十九日

本堂庫裡落慶法要

十時 稚児庭儀出発

十一時 稚児到着

十一時半 お斎

十二時半 落慶法要 勤行

献灯 献華 献香

行道散華

十三時半 記念式典

感謝状贈呈

十四時半 記念法話 松本梶丸先生

「人間の眼 如来の眼」

十六時 モチまき



献華 献香



献灯

写真でたどる落慶法要



相良四日市別院輪番祝辞



福円寺宇佐組長祝辞



松本梶丸先生



田中工務店様 感謝状



麻生棟梁様 感謝状



浜永建材店宇佐瓦センター様 感謝状



総代長 感謝状



前坊守 感謝状



前住職 感謝状



稚児行列



参勤法中・親戚一同





立華(専正池坊)土井社中



総代さんによるお華束盛り



お斎会場(老人憩いの家)

お斎つくり(老人憩いの家にて)



餅まき

蓮如上人五百回御遠忌

表 白

敬つて大慈大悲の阿弥陀如来、人界の教主釋迦如来、合わせて浄土真宗の開祖親鸞聖人並びに十方三世一切の諸佛三宝に白して申さく。

本日ここに、ご参集たまわりし有縁の法中、並びに門信徒の皆様と共に、ここをこめて御尊前を莊嚴し、蓮如上人五百回御遠忌法要を厳修したてまつる。

それおもんみれば、上人は今から五百八十二年前、應永二十二年二月二十五日、大谷本願寺に生を享け、貧困の中にあつてなお志し高く、十有五歳にして念佛興隆を誓ひ給う。

それよりこのかた数多の聖教を繙きて螢雪の功を積み、しばしば聖典を書写して宗学を研鑽し給う。

御年四十三歳、第七代存如上人遷化するや門信徒の懇望を一身に受けて本願寺留守職を継承したもう。

たちどころにその徳を慕つて参詣する者いや増せば、延暦寺の僧ねたみて大谷の堂宇を破却せり。

それより上人は親鸞聖人の御影を奉じて難を近江に避け、引き続き吉崎、山科、大阪と所を移して正法の弘通に努めらる。

門前たちまちに市を成し、念佛の声、遠近にあまねく、一代にして真宗紹隆の大業を成し遂げ給う。

まことにこれ末代の不思議、一如来の深きおぼしめしならん。

上人その間しきりに書簡を送りて各地の門侶を教化し給ひ、今に残れる『お文』実に三百通になんなんとす。

かつは親鸞聖人の『正信偈』『三帖和讃』を開板し、朝夕勤行の風儀を定めて、ひたすら門徒行儀の確立と信心弘通に努め給う。

まことに上人の御勸化なかりせば浄土の真宗いかにして今あらん。真宗のみ教え今に伝わらざれば、末代凡夫の我、三界流転の鬼に止まらん。

かにかくに上人の御恩徳に想ひ到れば、讃仰の念、胸に満ち、報謝の念佛、口にあふるる。

悲しき哉、時に明應第八年三月二十五日、御年八十五をもつて浄土に遷化したもう。

それより歳月を経ること五百年、いつしか上人のみ教えから遠く離れ、五濁の世に迷妄の徒となりし我ら、上人の五百回御遠忌の勝縁に導かれて、必ずや真実信心を獲得し、昏闇の世を破つて念仏の声を高らかにあげん。

時に平成九年十月十八日、

勝福寺住職釋知道、伏して請う、
三宝深く大悲を垂れて、哀愍摂受したまえ。

紆余曲折した難工事

棟梁・総代 麻生史紀

蓮師御遠忌法要、勝福寺本堂庫裡落慶法要も無事終わり、当時のことがいろいろと思い出され

てきます。準備期間の一年、改修工事の一年、法要までの一年、…三年間、多くの人達との出会いがありました。その出会いを今後の人生の糧となる様にしたいと思います。

平成五年の台風による本堂屋根の改修工事の依頼を御住職より申し出られたのは、亡父の月命日のお経の後の事でした。

数日後の被害調査の結果、総代の皆さんと話し合いの上、屋根部分、向拝部分を奈良の大和社寺工営さんをお願いする事になり、平成八年



二月着工と決まり、工程表も出来、準備は整いました。

いよいよ二月になり足場、仮屋根、解体と仕事は順調にすべり出しました。ここまでは良かったのですが、解体を進めると、本堂余間の根太、本堂の柱、さらには廊下、外壁など永年の雨もりや白蟻被害による追加工事が次々と出てきました。

また宮大工さんとの手違いによる工事の中断のため、梅雨前の完成予定が大幅に長引き、瓦葺き前の雨、お盆の思わぬ台風による仮屋根の破

損、それによる雨もりなど前途多難な再出発となりました。

そうした中にあつても、皆さんと力を合わせ、先ず出来る事から精一杯頑張れば何とか成る、無理せず、あせらず、前向きに、その中から何かが見えて来るはずだと信じ、無心で仕事に打ち込む毎日でした。

いつしか残暑も過ぎ涼風の吹く頃、仮屋根も取れ、屋根が秋空にくっきりと姿を表しました。外観を一新し、気持ちも一段と引き締まりました。これも仏様を信ずる門信徒の方々のお陰と感謝するとともに、より一層の努力を怠る事でした。

秋も深まる頃には瓦葺きも終わり、樋工事、建具の建て付け、電気工事と進み、最後に、足場を解体し、残材の整理、整地と順調に工事が終わったのは稲の収穫もすみ、麦まきの始まる頃でした。

平成九年元旦、勝福寺にお参りさせていただき、改修の出来た内陣に御本尊を拝し、本堂をおおぎ見ですがすがしい気持ちでした。

改修にかかわって下さった人々に心中より御礼申し上げるとともに、皆様の幸せを念じつつ……合掌

法要を支えた人たち

事務局長 吉松忠徳

多くの僧侶が一堂に集まって、営まれた法要は、宗教のひとつのドラマだった……。

勝福寺で十月十八、十九の両日に営まれた、蓮如上人五百回御遠忌法要と勝福寺の本堂、庫裡の落慶法要が無事終わり、法要の計画、運営のメンバーに加えてもらった私にとっては、初めての貴重な体験となりました。

今年二月、門徒総代三十一人の中から十一人で法要委員会が作られ、この委員会で事前の準備計画や法要当日の行事計画、分担など話し合い、素案ができると、総代会を開き、みんなに諮^{はか}つて具体案を決める、という手順を何回も繰り返しました。法要委員会事務局を仰せつかった私も、新聞記者時代に覚えたワープロを使って、計画表作りなどに、少しお手伝いをさせてもらいました。

それにしても法要は、多くの人手が必要だということを知られました。そして多くの門徒の方々の力が結集されて、大法要も無事終わることが出来ました。十年前の宗祖御生誕八百年慶讃法要並びに住職継承法要で、法要委員会の事務局長を務められた山本の佐々木孝司さんには、多くを教えてもらい、助けていただきました。

今回の法要の事前準備をしていたある日、(ご本人は記憶されていないと思いますが) 佐々木さんが「手落ちのないように、お互いにみんなで声をかけよう。人間は物忘れすることがよくある。あれはできたかえ。あれは誰がするのかわと、ちよつと声をかけ合おう。声をかけられた人は、いらん世話をやくな、と腹を立てんじおくれ」といわれた。目配り、気づき、暖かい思いやりの心に、頭が下がりました。

今度の法要で、多くの門徒の方々とお会い出来、法要という行事を通して、多くを学び、教えられました。寺のため、法要のために、加勢する門徒の方々のひたむきさに、事務局を仰せつかった者として、感謝の言葉が見つかりません。門徒の方たちの言動から、大切なものを勉強させてもらいました。このような方々と勝福寺の同じ門徒であることは、本当にうれしいことで、いつまでも私の誇りと、自慢にしていきたいと思えます。

夢のお諭し^{さと}

お斎係・総代 渡辺ミツル

この度の十月十八日、十九日の二日間、蓮如上人五百回御遠忌、並びに、落慶法要の感想について何か一筆とのご連絡を受け、私にそんな大それた事を考え出す事が出来ようか、たった今のことさえ忘れがちな私なのに、と思いましたが、……やっぱり仏様に何かお礼の言葉でも書いた方がよいのかなと思ひ直し、ペンを取りました。

いろいろとお手伝いの分担が沢山ございましたが、私はその一つのお斎作りということになりました。話し合いの中で、私をその責任者にとのことでしたが、八十三歳の私は今したことさえ忘れがちだし、また十分仕事もできないので、若い盛りの人になつて切り盛りしていただくように話をつけてもらいましたら、何とか心も休まれるのではないかと、自分の「我」が浮かびました。

が、やはり心は休まねず、いろいろと、時間通りに準備が出来るだろうかと思えますと頭の中は考えで一ぱい、若い人におまかせしようと思えますが……、そうしたある夜、久方ぶりに主人の夢を見ました。

主人は本堂にて一生懸命に何事かお手伝いをしているではありませんか。「あら、主人も頑張っている、私も頑張らなきゃ」と思い元気が出て参りましたら、目が覚めて夢でした。この法要については前々から主人も考えていたのではなからうか、「俺も加勢するから、おまえも頑張らなきゃ」との夢のお諭しだったのかと思うと、元気が湧いてきました。

この法要は私にとりましては一生通しての大法要だったのかと思うと何となく心嬉しく思われました。

責任者を引き受けてくれた大塚の渡来マチ子さんをはじめ、御門徒の方々の御加勢をえまして、時間通り楽々と仕上がり、味付けも皆様より喜ばれるお斎が出来上がり、なにより心からみ仏のご加護だと喜びました。

十八日、十九日の二日間にわたり梶丸先生のご法話も頂き、「人間の幸せは尊敬する人のあることです」と言われ、その通りだと思いました。

お天気も上々、二日間立派な法要が出来、心よりみ仏のご加護と勝福寺住職ご夫妻のご人徳と心よりお礼もうします。

「寺」を支えているものは

坊守 藤谷純子

今回の改修工事は、平成の大修理ともいわれたように、寺族・門信徒あげての大事業でした。総代会への提議そして承認、各地区へ出向いての説明とお願ひ、いよいよ記帳と納金。一方では請負業者の決定と予算見積もり、その中で屋根の構造を変えることや宮大工さんとの提携など、話が進むうちに予想を上回る大工事となってきたのでした。予算額オーバーをどうするか、工事の遅滞と台風による被害をどうするか、何度か難問が持ち上がりましたが、それらをよりよい方向へ丁寧に運んでゆけたのは、終始一貫工事現場を担って下さった麻生棟梁と住職との深い信頼関係だったと思います。

この信頼関係を成り立たせていたのは「寺」というものではないかと思うのです。麻生棟梁はもともと勝福寺の門徒であり総代さんです。寺というものの何か深い思い入れがなかったら、朝早くから日のかげるまで、何があっても怒りをむき出しにしたり、投げやりになったりせずに黙々と仕事をし続けることはなかったでしょう。また住職とて、「ここはこうしたらもっと良くなるのではないか?」という構想と、ご門徒の人々にかける負担との両方を案じ続けた三年間の精神力というものは、目先の自分というところからは出てこなかったらと思うのです。先日表白で

「この寺が門信徒の心の依り所であった」という表現を聞いた時、これからもこの寺が皆の心の依り所であり聞法の道場であるようにとの住職の深い願ひにふれたように感じました。

よく坊守研修会などでは「現代における寺の意義は?」とか「私が寺に在る意義は?」などというテーマが掲げられます。私は寺に生い育ったのではないからか、今度の一連の工事、落慶法要に到るまで、予想だにできなかった多くの方々のお力添えによつてこそ運ばれてきていることを知って、つくづく寺というところは不思議な所だナーと思わされました。蓮如さまが「冥加^{みようが}」^{みようけ}「冥慮^{みようろ}」「冥見^{みようけん}」^{みねん}といわれ、親鸞聖人が「仏法不思議」といひ「願力自然^{じねん}」といわれたのは、このようなことを指しているのではないのでしょうか。また、そのことを松本先生は「法話の中で「このたびの落慶法要を一番喜んで下さっているのはご本尊である阿弥陀如来様でありましょう」と仰られたのではないのでしょうか。

真宗の寺院は聞法の道場であり仏徳讃嘆の場所です。この、御本尊を讃仰するという一点が欠けた時には、せつかくのこの事業が損得勘定の世界に落ちて、善きにつけても悪しきにつけても「それでも、そやけど、あいつが、こいつが」との比べ合い、裁き合い、そらごとたわごに終わってしまいます。皆がそれぞれの精一杯の力を合わせてできあがった事業です。お互いに「ありがとうございます」「ご苦労さまでした」との言葉しか交わし合う言葉はないように思います。

御 礼

寒さ厳しき中にも年あらたまり、皆様方におかれましては、ご健勝のうちに新しき日々をお過ごしのことと、お喜び申し上げます。

さて、平成六年に思い立ち、三カ年計画で取り組んで参りました「勝福寺本堂・庫裡改修事業」も、昨年暮れの落慶法要で無事終了することができました。これもひとえに門信徒の皆様のご御協力によるものと、感謝いたしております。

つきましては、この度の会計を、平成九年十一月二十八日に矢次慶吾さん、河野尚之さん、石川陽一さんに監査して頂きました。そして十二月六日に総代会を開いて監査報告を検討、承認するとともに、残金（六七七、四四〇円）は今後のために預金しておくことと致しました。

ここに皆様方にご報告申し上げ、ご承認下さるようお願いするとともに、以上をもって、この度の大事業を終了したいと思います。長い間のご協力ありがとうございました。

今後とも、お金仏の声を子々孫々にまで伝えてゆけるよう、お互いに励まし合って歩んで参りたいものと存じます。

平成十年一月十日

雪浪山勝福寺

住 職 藤谷知道

総代長 外園 章

性 総代一同

門信徒各位

「雪浪山勝福寺本堂庫裡改修事業」会計報告 (H9・11・28)

総収入	74,954,527
総支出	74,277,087
残 金	677,440

収入の部

門信徒御禮志	39,715,000
前住職御禮志	10,400,000
仕職負担分	12,400,000
前住職法要縁越金	5,507,134
借入金	5,000,000
法要当日御法札、御祝儀	1,988,000
法要当日お賽銭	43,300
難児募入金	623,000
その他(利子 他)	78,684
合 計	74,954,527

支出の部

庫裡改修工事(田中工務店)	14,300,000
本堂改修工事(大和社寺工務)	13,806,895
同 (麻生工務店)	18,019,384
同 (宇佐瓦)	11,778,829
随工事(望月板金)	1,030,000
遊込印刷(藤堂書店)	83,900
小野屋建具(台所ガス工事)	97,000
吉松植木	100,000
四日市別荘お札(境内借用)	122,279
若林仏具店(仏具移動、養生)	298,700
同 (納骨堂)	1,212,650
野島書店	165,000
オクナカ(アルミサッシ)	121,770
宇佐石材(天水橋)	250,000
三大木工(障戸)	100,000
池田造園(境内整備)	2,110,000
宇佐英倫(白蟻駆除)	500,000
借入金返済(含利子)	5,039,328
御慰労名札製作費	377,000
落慶法要関係費(記念品代を含む)	4,579,984
その他(振替手数料他)	4,368
合 計	74,277,087

資料 H10年1月事業終了のお礼

資料 H9年11月 会計報告

【10月18日～19日】

落慶法要行事分担表 (案)

- 【総務係】(全体の進行、統括)
外園章・会長、中園静雄・副会長
徳々木孝司・副会長
- 【受付係】(法中、来賓、親族、門信徒の受付、案内、)
- 【式務係】(式辞)
福内寺
- 【会計係】(現金出納、志納金の記帳、提示)
中園静雄、峯 馨、渡辺正綱
- 【お賽係】(法中、来賓、親族、門信徒の詣り)
総代の奥様は加勢をお願いします。
- 【接待係】(法中、来賓の方々の接待)
>19日…4人
- 【警備係】(難児行列、駐車場の整理)
>18日…3人 >19日…3人
- 【難児係】(難児の受付、衣類の受け渡し)
>18日…男女5人 >19日…男女5人

【法要委員会事務係担当者】

吉松忠徳 山本裕敬 矢次慶喜

【落慶法要行事分担表】(案)	
日	時間
17	8:30
17	9:00
17	9:30
17	10:00
17	10:30
17	11:00
17	11:30
17	12:00
17	12:30
17	13:00
17	13:30
17	14:00
17	14:30
17	15:00
17	15:30
17	16:00
17	16:30
17	17:00
17	17:30
17	18:00
17	18:30
17	19:00
17	19:30
17	20:00
17	20:30
17	21:00
17	21:30
17	22:00
17	22:30
17	23:00
17	23:30
17	24:00
17	24:30
17	25:00
17	25:30
17	26:00
17	26:30
17	27:00
17	27:30
17	28:00
17	28:30
17	29:00
17	29:30
17	30:00
17	30:30
17	31:00
17	31:30
17	32:00
17	32:30
17	33:00
17	33:30
17	34:00
17	34:30
17	35:00
17	35:30
17	36:00
17	36:30
17	37:00
17	37:30
17	38:00
17	38:30
17	39:00
17	39:30
17	40:00
17	40:30
17	41:00
17	41:30
17	42:00
17	42:30
17	43:00
17	43:30
17	44:00
17	44:30
17	45:00
17	45:30
17	46:00
17	46:30
17	47:00
17	47:30
17	48:00
17	48:30
17	49:00
17	49:30
17	50:00
17	50:30
17	51:00
17	51:30
17	52:00
17	52:30
17	53:00
17	53:30
17	54:00
17	54:30
17	55:00
17	55:30
17	56:00
17	56:30
17	57:00
17	57:30
17	58:00
17	58:30
17	59:00
17	59:30
17	60:00
17	60:30
17	61:00
17	61:30
17	62:00
17	62:30
17	63:00
17	63:30
17	64:00
17	64:30
17	65:00
17	65:30
17	66:00
17	66:30
17	67:00
17	67:30
17	68:00
17	68:30
17	69:00
17	69:30
17	70:00
17	70:30
17	71:00
17	71:30
17	72:00
17	72:30
17	73:00
17	73:30
17	74:00
17	74:30
17	75:00
17	75:30
17	76:00
17	76:30
17	77:00
17	77:30
17	78:00
17	78:30
17	79:00
17	79:30
17	80:00
17	80:30
17	81:00
17	81:30
17	82:00
17	82:30
17	83:00
17	83:30
17	84:00
17	84:30
17	85:00
17	85:30
17	86:00
17	86:30
17	87:00
17	87:30
17	88:00
17	88:30
17	89:00
17	89:30
17	90:00
17	90:30
17	91:00
17	91:30
17	92:00
17	92:30
17	93:00
17	93:30
17	94:00
17	94:30
17	95:00
17	95:30
17	96:00
17	96:30
17	97:00
17	97:30
17	98:00
17	98:30
17	99:00
17	99:30
17	100:00
17	100:30
17	101:00
17	101:30
17	102:00
17	102:30
17	103:00
17	103:30
17	104:00
17	104:30
17	105:00
17	105:30
17	106:00
17	106:30
17	107:00
17	107:30
17	108:00
17	108:30
17	109:00
17	109:30
17	110:00
17	110:30
17	111:00
17	111:30
17	112:00
17	112:30
17	113:00
17	113:30
17	114:00
17	114:30
17	115:00
17	115:30
17	116:00
17	116:30
17	117:00
17	117:30
17	118:00
17	118:30
17	119:00
17	119:30
17	120:00
17	120:30
17	121:00
17	121:30
17	122:00
17	122:30
17	123:00
17	123:30
17	124:00
17	124:30
17	125:00
17	125:30
17	126:00
17	126:30
17	127:00
17	127:30
17	128:00
17	128:30
17	129:00
17	129:30
17	130:00
17	130:30
17	131:00
17	131:30
17	132:00
17	132:30
17	133:00
17	133:30
17	134:00
17	134:30
17	135:00
17	135:30
17	136:00
17	136:30
17	137:00
17	137:30
17	138:00
17	138:30
17	139:00
17	139:30
17	140:00
17	140:30
17	141:00
17	141:30
17	142:00
17	142:30
17	143:00
17	143:30
17	144:00
17	144:30
17	145:00
17	145:30
17	146:00
17	146:30
17	147:00
17	147:30
17	148:00
17	148:30
17	149:00
17	149:30
17	150:00
17	150:30
17	151:00
17	151:30
17	152:00
17	152:30
17	153:00
17	153:30
17	154:00
17	154:30
17	155:00
17	155:30
17	156:00
17	156:30
17	157:00
17	157:30
17	158:00
17	158:30
17	159:00
17	159:30
17	160:00
17	160:30
17	161:00
17	161:30
17	162:00
17	162:30
17	163:00
17	163:30
17	164:00
17	164:30
17	165:00
17	165:30
17	166:00
17	166:30
17	167:00
17	167:30
17	168:00
17	168:30
17	169:00
17	169:30
17	170:00
17	170:30
17	171:00
17	171:30
17	172:00
17	172:30
17	173:00
17	173:30
17	174:00
17	174:30
17	175:00
17	175:30
17	176:00
17	176:30
17	177:00
17	177:30
17	178:00
17	178:30
17	179:00
17	179:30
17	180:00
17	180:30
17	181:00
17	181:30
17	182:00
17	182:30
17	183:00
17	183:30
17	184:00
17	184:30
17	185:00
17	185:30
17	186:00
17	186:30
17	187:00
17	187:30
17	188:00
17	188:30
17	189:00
17	189:30
17	190:00
17	190:30
17	191:00
17	191:30
17	192:00
17	192:30
17	193:00
17	193:30
17	194:00
17	194:30
17	195:00
17	195:30
17	196:00
17	196:30
17	197:00
17	197:30
17	198:00
17	198:30
17	199:00
17	199:30
17	200:00
17	200:30
17	201:00
17	201:30
17	202:00
17	202:30
17	203:00
17	203:30
17	204:00
17	204:30
17	205:00
17	205:30
17	206:00
17	206:30
17	207:00
17	207:30
17	208:00
17	208:30
17	209:00
17	209:30
17	210:00
17	210:30
17	211:00
17	211:30
17	212:00

平成二十九（二〇一七）年～令和元（二〇一九）年

響流山勝福寺

親鸞聖人
惠信尼公

七五〇回御遠忌法要

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで！ —



御遠忌委員会

委員長

向野 茂

副委員長

（法要担当）松尾由美子

”

（組織担当）松本 順

”

（広報担当）渡邊 重昭

事務局長

渡辺 和義

会計

牧本 和孝

法要担当委員

奥永義彦・佐藤麗子・渡辺久仁子

丸野寿夫・若林範子・松本知代

藤谷 信・藤谷 風

組織担当委員

香田紀子・瀬々和義・牧本和孝

渡辺輝幸・小林 聖

広報担当委員

渡辺和義・後藤啓一郎・渡邊浩晃

香田紀子・松本知代・向野 茂

藤谷知道・藤谷純子

御遠忌本部会

向野 茂・松尾由美子・松本 順

渡邊重昭・渡辺和義・牧本和孝

藤谷知道・藤谷純子

経緯

平成二十三(二〇一一)年春、御本山で「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」が厳修されました。引き続き、平成二十八(二〇一六)年春には、日豊教区・四日市別院においても「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」が厳修されました。

そこで「今度は私たち勝福寺でも御遠忌を勤めましょう」と、皆さんに呼びかけたところ、「お寺が言うのなら、ついに行ってみようか」というような感じで、このたびの御遠忌がスタートしました。

ところで、御本山も四日市別院も、御遠忌を機に本堂等を修復するという現実的な課題がありました。勝福寺は平成九年に建物の修復を終えていたため、その心配はありませんでした。何よりも大事だったことはご先祖が相続してきた「お念仏のこころ」が、すっかり判らなくなっていることでした。

H 28・9・26	総代会	勝福寺でも御遠忌を勤めることに決定。
H 28・12・13	第一回懇談会	常任委員、婦人会役員、編集委員で、御遠忌のイメージ作り。
H 29・5・8	第二回懇談会	勝福寺の現状についてワークショップをしながら考える。
H 29・7・22	第三回懇談会	中西駐在教導より、お寺のあり方について問題提起。ワークショップ。
H 29・9・9	第四回御遠忌委員会	委員長以下、御遠忌委員会組織を決める。法要・組織・広報の三部門。 御遠忌記念事業（お待ち受け聞法会・勝福寺史編纂・真宗本廟奉仕団） 法要日時（H・31・11・26～28）・お寺のあり方を時代相応に改変していく。
H 29・10・17	第五回御遠忌委員会	御遠忌テーマ決定。
H 29・11・20	第六回御遠忌委員会	テーマ垂れ幕作成・御遠忌看板作成。御門徒全員にテーマ短冊を配布。
H 29・12・14	第七回御遠忌委員会	ご門徒へアンケートを実施（広報担当）。 報恩講初日に「御遠忌お待ち受け開会式」を行うことを決める。
H 30・1・6	第一回広報部会	お待ち受け聞法会チラシ作成 勝福寺史編纂担当決定。
H 30・1・19	第一回法要部会	「御遠忌お待ち受け開会式」の役割分担。お待ち受け聞法会の役割分担。
H 30・2・20	広報部・組織部	アンケート集計。
H 30・3・7	組織部 他	大分組・法蓮寺に、寺院運営の視察。
H 30・11・25	第八回御遠忌委員会	「お待ち受け聞法会」第10回～第20回の講師決定。御遠忌法要の内容決定。 内陣荘厳の一部修復を決定（永代経御懇志積立金で）。テーマ作品を募集する。 御遠忌御懇志について協議。御遠忌本部会を設置。

そこで、このたびの御遠忌は、お念仏の信心を確かめる御遠忌にすることになりました。

そうしたこともあり、御遠忌委員会で話し合いを大切にし、みんなで御遠忌の中身を決めていきました。御遠忌テーマ「親鸞さま なぜ お念仏なの？」― 出会おう、語ろう、今ここので！― もこうして出来あがり、法要部会を中心に、二十回に渡ってお待ち受け聞法会を開催しました。

組織部会はお寺のあり方を検討し、アンケートをとり、あらたに「勝福寺運営規則」をつくりました。

広報部会は『響流山勝福寺―その歴史と歩み―』に取り組みました。さらに、お待ち受け聞法会を中心にした法話集や、御遠忌テーマ随想や作品展に出品された作品による作品集等の出版に取り組むことになりました。

また御遠忌本部会では埃まみれになっていたお荘厳の一部を彩色し直すことにしました。

このたびの御遠忌を勤めることを通して、勝福寺がお念仏の僧伽となることを願っています。

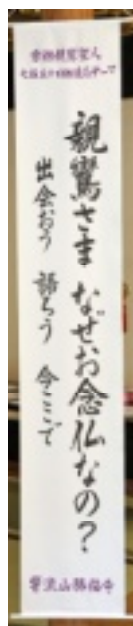
R 1・10・29	R 1・10・1	R 1・9・24	R 1・9・12	R 1・8・26	R 1・8・2	R 1・7・29	H 31・4・16	H 31・3・20	H 31・2・27	H 31・2・14	H 31・2・5	H 30・12・21	H 30・12・18
第二回実行委員会	第一回実行委員会	第四回組織部会	総代会	御遠忌拡大本部会	御遠忌本部会	第三回組織部会	臨時総代会	第九回御遠忌委員会	第二回広報部会	第二回組織部会	第三回法要部会	第一回組織部会	第二回法要部会
事前準備や法要当日における担当やスケジュール等を決定。	各部門の内容の確認。御案内の検討。事前準備についての検討、等。	勝福寺表彰規定を決定。	「響流山勝福寺運営規則」を承認。法要一部変更。お斎、イベントは別院本堂で。パネルディスプレイは中止。作品展示はお座敷で。最終日に餅まき。総代も実行委員に。御案内は10月中旬に。参詣、お手伝いを確認。	御遠忌法要の業務確認。御遠忌法要実行委員会を結成。	御懇志の集計。目標達成。	「響流山勝福寺運営規則」（案）を審議の上、確定。	響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌事業計画案を承認。 響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌予算案を承認 御遠忌趣意書を本部会で作製。七月はじめに御門徒に依頼。七月末に集金。	本堂内陣荘厳の彩色工事は「はせがわ美術工芸」に決定。御遠忌御懇志は報恩講の御法礼（三千五百円）を基準に、各自におまかせ。目標は二百万。	テーマ作品募集要項の決定。勝福寺史、八月末の原稿完成を目指す。	「勝福寺運営規則」には総代会だけでなく教化事業も入れる。また、御法礼と本山納金については会計を公開していく方向で規則を造る。	11月23日、24日の法要内容について協議。23日、音楽法要にする。お斎は弁当を頼む。24日、楽を依頼。記念式典の内容を協議。	「総代会規則」を改め「勝福寺運営規則」を作ることにする。本堂内に、総代、婦人会役員、ひびき委員等を記した掲示板を造る（後藤啓一郎さんに依頼）。	「お待ち受け聞法会」第10回〜第20回の受付、進行等について。法話テープ起こし担当決定。宿泊される先生の時の夜の懇談会の持ち方について。 11月23日恵信尼公御遠忌・記念イベント「薩摩琵琶Ⅱ桜井亜木子氏」に決定

御遠忌記念事業

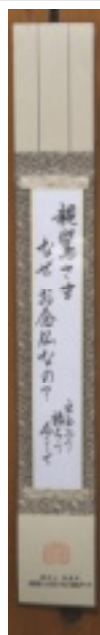
話し合いを重ねていく中で、次のような記念事業をすることになりました。

御遠忌テーマ

テーマ垂れ幕の作成（揮毫…森崎智子）



テーマ短冊をつくり、門信徒の皆様配布。



揮毫…丸野寿夫・渡来ひとみ・渡辺昌敏

森崎智子・後藤啓一郎・藤谷純子

向野理恵

テーマ作品募集

募集する作品の種類

- イ、（随想・作文） 口 （絵・書・写真）
- ハ、（短歌・俳句・川柳・詩）
- ニ、（手芸・工芸・その他）

※ 随想以外はテーマ自由。

作品の応募締め切りは九月末
作品は、御遠忌当日展示し、後に小冊子にする。

お待ち受け聞法会

第一回～第十回（二〇一八年二月～十一月）

・住職 釈尊の生涯（三回）

・親鸞聖人の生涯（七回）

・坊守 念仏生活を妙好人に学ぶ（十回）

第十一回～第二十回（二〇一九年一月～十月）

・ご講師の先生に出講していただく。

法要部会が中心になつて運営する。
毎回聞き書きをつくる。

真宗本廟奉仕研修と聖跡巡拝の旅

二〇一九年五月

七日～八日 親鸞聖人御旧跡巡拝

＊延暦寺会館宿泊

八日～十日 真宗本廟奉仕研修

＊同朋会館宿泊

＊本廟奉仕研修中、蓮如上人御影道中
に一部参加させていただく。

＊参加者二十二名

記念出版

『愚禿釋親鸞―その生涯と教え― 恵信尼公
―その生涯とお便り―』

＊お待ち受け聞法会テキスト

『響流山勝福寺―その歴史と歩み―』

＊御遠忌記念品

『御遠忌法話集』 御遠忌終了後

『テーマ作品集』 御遠忌終了後

内陣荘厳御修復

中尊関係（上卓・輪灯・瓔珞・金灯籠）

御開山関係（厨子・前卓・輪灯・瓔珞・金灯籠）

折障子

蓮如上人掛け軸修復

向拝幕（「かはづの会」寄贈）

【施行】（株）はせがわ美術工芸

お待ち受け開会式

平成三十(二〇一八)年の報恩講の初日(一月二十六日)に、「響流山勝福寺親鸞聖人・恵信尼公七百五十回御遠忌」の「お待ち受け開会式」を開催しました。いよいよ御遠忌に向けての第一歩です。

看板・垂れ幕除幕式

式は、渡辺久仁子さんの進行で進められました。最初に向野茂御遠忌委員長が挨拶で「長い期間ですが、皆さんと共に続けて行きましょう」と述べられた後、本堂正面の柱に掛ける看板と本堂内にかける垂れ幕の除幕式が行われました。看板の除幕は、揮毫(きこう)をしてくれた大塚の後藤啓一郎さん、垂れ幕の除幕は四日市の森崎智子



看板を書いてくれた後藤さん



垂れ幕が披露される瞬間

さん。お二人は「このご縁を大切にしたい」と話してくれました。この看板と垂れ幕は二年間、皆さんをテーマのように暖かく出迎えてくれます。

続いて短冊を書いて下さった丸野寿夫さん、渡辺昌敏さん、渡来ひとみさん、後藤啓一郎さん、森崎智子さん、向野理恵さんと坊守さんが紹介されました。

坊守さんからは、「最初は印刷した短冊にしようと思ったが、お金もかかるし、心を伝える意味でも手作りにしたいと思い、ご門徒さんに書いてもらいました。でも一人に四十枚づつお願いしたので大変だったと思います」と、エピソードを話してくれました。

御遠忌讃歌

次に「御遠忌音頭」を香田紀子さんの口説きと藤谷信さんの太鼓の伴奏で、婦人部の八人がお揃いの藤色の手拭いを肩にかけ披露してくれました。踊りの最後には、全員で「親鸞さま なぜ お念仏な



短冊を書いてくださった方々



の？ 出会おう 語ろう 今ここで」と声高らかに読み上げ、会場を盛り上げてくれました。

最後に、佐藤麗子さんが感話で「仏法を学び実践するサンガになるよう足を運びます。そして、ありがとうという感謝の

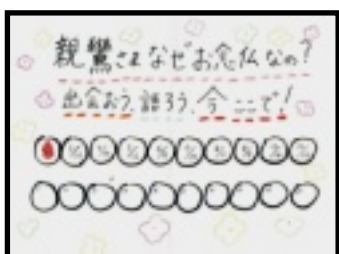


気持ちで二十回ある聞法会には全部出席します。皆さん方も一緒に学びましょう」と力強く決意を語ってくれました。

聞法会 はじまる

記念事業の一つである「お待ち受け聞法会」が二月十日(土) 午後一時半、スタートしました。受付で資料とその資料を綴じるバインダーをもらい、出席カードに「蓮の花のハンコ」を押してもらおうと思わず子ども時代の夏休みのラジオ体操を思い出しました。住職と純子坊守さんのお話を聞く楽しみと共に、カードがハンコで埋まっていくのも楽しみになりました。

なお、最初の十回は、住職さんが、釈尊や親鸞聖人の教へと生涯について、坊守さんが、お念仏の生活を送った「妙好人」についてお話してくれます。時間をさいて、一緒にお聞きしましょう。



お待ち受け聞法会 ①

二〇一八年二月より、いよいよ、お待ち受け聞法会が始まりました。第一回から第十回（同年十一月）までは、住職と坊守が担当。

住職は「釈尊の生涯」を三回、「親鸞聖人の生涯」を七回にわたって学びました。

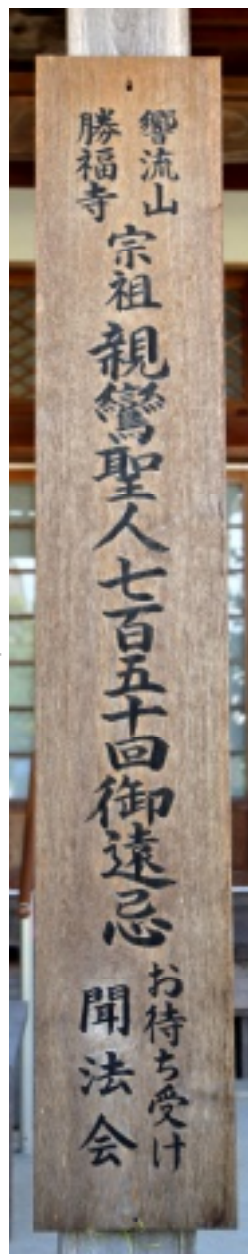
坊守は「念仏生活を妙好人に学ぶ」の題のもと、十人の妙好人を選んで、その教えを学びました。

- 第一回 榎本栄一さん
- 第二回 因幡の源左さん
- 第三回 浅原才市さん
- 第四回 三味線婆ちゃん
- 第五回 木村無相さん
- 第六回 池山栄吉先生
- 第七回 藤原正遠先生
- 第八回 五十嵐 務さん
- 第九回 藤田ジャクリンさん
- 第十回 恵信尼公

今回も前回の百日聴聞会にならって、その要約を次回までに作って、受講者やご門徒にお配りしました。



出席カードの表紙絵



仏教入門講座のお知らせ

～響流山勝福寺 親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け聞法会～

仏教を初歩から学んでみたいと考えているあなた
日々の暮らしに息苦しさやむなしさを感じているあなた
将来に不安を感じているあなたへ

仏教入門講座で、一緒に「生きること」を学んでみませんか。
受講料は無料です。皆様のご参加をお待ちしています。

【御遠忌テーマ】

親鸞さま なぜお念仏なの？ ～出会おう 語ろう 今ここで～

仏教入門講座（御遠忌聞法会）日程

日程：第1回 2018年2月10日（土） 13：30～15：30
＊ 第2回以降、毎月第2土曜日 13：30～15：30
場所：勝福寺本堂（宇佐市四目市1426番地）
講師：勝福寺住職 藤谷知通、勝福寺坊守 藤谷純子 ほか

<前半 10 回の主な内容と進め方>

○釈尊のお覺りとは何だったのか、親鸞聖人のお念仏の教えは現代人にも通じる教えなのか、わが身の上に関きながら、皆さんと一緒に考えていきます。（住職担当）

・内容予定（釈尊の教え・親鸞聖人のご生涯・念仏・本願・浄土・煩惱・宿業等）

○仏教の教えに生きた「妙好人」とよばれる人たちの生き方について学びます。（坊守担当）

○毎回、受講者の皆さんの中から感話（日々の感想や仏法を聞いて感じたことなどを話すこと）を行います。

○講座終了後に、質問や「ここのところをもっと聞いてみたい」と思われた方のために、講師を交えて簡単な座談の席を設けます。

○毎回、「聞き書き」を作製し、次回に配布します。

<後半 10 回の予定>

○皆さまのご希望を参考にして、遠近を問わず、講義先生にご出講をお願いします。

主 催：勝福寺 親鸞聖人七百五十回御遠忌委員会
連絡先：勝福寺（0978-32-1806）

お待ち受け聞法会

②

二〇一九年一月よりは御講師をお迎えしての聞法会です。ついでには、このたびの「お待ち受け聞法会」が勝福寺を超えて、一人でも二人でも多くの人が仏法に出遇うご縁となることを願ってチラシを作り、新聞に折り込み広告を入れました。

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？



みなさまの「参詣を心よりお待ちしています」

「長生きはしたいけど、寂れた老後は嫌」

……人間だけにある死の畏れ。

「一人でいるのは淋しいけれど、みんなといえるのも煩わしい」

……なぜ、人は孤独なんだろう。

「何かにつけて、善いの、悪いのと、気になってしまう」

……心の迷いは死ぬまで尽きず。

そんな「生死・自他・善悪」の矛盾対立を超えて、

「違ったままが、みな尊い」一如（いちに）の世界に私たちを導いてくださる

お念仏の教えを聞いてみませんか。

講師予定表

会費五百円

※講師等は費を頂いてください。

一月十日(土) 田畑 正久
二月 九日(土) 村田 和樹
三月 九日(土) 伊藤 元
四月十三日(土) 延塚 知道
五月十一日(土) 百々海 真
六月 八日(土) 愈 漢子
七月十三日(土) 牧野 桂一
八月十七日(土) 荒木 半次
九月十四日(土) 加来 雄之
十月十二日(土) 横川 香正

真宗大谷派 勝福寺 宇佐市四日市1426 (tel) 0978-32-1806

一月十二日 田畑 正久 先生(宇佐市 佐藤第二病院長)

講題「お念仏のこころを尋ねて」

二月 九日 村田 和樹 先生(輪島市 曹洞宗・龍昌寺住職)

講題「清浄なるもの」

三月 九日 伊藤 元 先生(北九州市 徳蓮寺前住職)

講題「宗祖の問い」

四月十三日 延塚 知道 先生(京都市 大谷大学名誉教授)

講題「本願の名号」

五月十一日 百々海 真 先生(東京都 了善寺住職)

講題「心理から真理へ」

六月 八日 愈 漢子 先生(沖縄県 真宗大谷派教師)

講題「解放への祈り」

七月十三日 牧野 桂一 先生(大分県 発達支援研究所々長)

講題「生活の中で出遇う親鸞さま

の教え」

八月十七日 荒木 半次 先生(京都市 城陽作業所支援員)

講題「真宗遇いがたし」

九月十四日 加来 雄之 先生(京都市 大谷大学教授)

講題「南無阿弥陀仏のみぞまこと」

十月十二日 横川 香正 先生(佐伯市 善正寺住職)

講題「親鸞聖人と聖徳太子」

法要委員を中心に、順にテープ起こしを担当し、下のような聞き書きをつくって
いきました。他の先生の抜粋を2頁後に載せています。

無
明
和
樹

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？
— 出会おう、語ろう、今ここで！ —



自分ということ

親鸞さまは自分のことを言うのに、「罪惡深重・煩惱熾盛の衆生」と言いますよね。自分というのは自分の身で負えないほどの業を背負ってる、「どうしようもない者がここにいった」っていうことを言うわけです。

知らぬうちに僕らの毎日は今の世の中の常識の中で暮らしています。そのことは大事なことになるんですけど、自分ということが問えなくなってしまうっているわけです。

親鸞さまは、罪惡深重のものを背負っているから、こんな身が修行をして仏になろうとしてもできない、と。だから、修行ということがないわけです。それに対して、道元さんという方は「ともあれ修行せよ、全身心をかけて修行せよ」と言うわけです。

道元さんは「草木叢林の無常なる、すなわち仏性なり、人物身心の無常なる、これ仏性なり」とも言う。僕らの普通の思いでは「この間、正月だったのにもう梅が咲いて、早いね」とか「ついこの間30超えたばかりなのに、もうこんなおっさんに

なつてしまった」とかね、そういうことで無常を感じるわけです。無常っていうのは自分が感じる問題だと思ってる。

でも仏教で言う無常っていうのは、無常が主体なわけです。無常としてある中に「オレ」って言っている者がおる。梅なら、梅の木が今花咲いていることで「梅」っていうことを思う。でも人間が「梅だ」と思う前に、「梅」とも言えないものがそこにおるわけです。これ（自分）も同じです。「オレは修行がで

清浄なるもの

村田和樹先生

石川県輪島市・
龍昌寺住職（曹洞）

2019年2月9日

毎日の中に、接心と言いまして、日に14時間、朝4時から晩の9時まで座る日がある。

老師は「文句なく座れ」って言ってます。「意味や理由を探すな」と。壁に向かって座ってるんですけど、皆さん、10分でもない、座ったとありますか？

ちよつと座ると、なんて時間が長いことやら、と思うですよ。「何にも考えるな」って言われても、何にも考えないことなん

きる身でない」とか言う必要がない。そのまま、これ（自分）が無常として、仏性としてあると言う。

修行寺にて

僕が世話になっていた修行寺では、毎日9時間座ります。朝5時から8時まで座り、終わると掃除して、ご飯食べて、また9時から12時まで座る、昼から5時まででは作務の時間ですけど、大概みんなに見えんようにして一生懸命本読んで、また晩の6時から9時まで座る。そうした

て、そんなのできやしないです。妄想ばかりです。妄想が止んだらね、眠ってるんです。眠って目が覚めたら、ぼんやりしてるんです。その3つの繰り返しです。

老師は「勉強するな」って言ってます。「ただ座れ」と。「座ってからどうするんですか」と聞くと、「10年ただ黙って座れ」と。10年終わったら、「更にもう10年」って言ってます。

20年経ちました。そしたら老師は「更にもう10年座れ。30年経ったら文句も出んたろ」と言うんです。

僕、座り始めてから50年経ってるんですけど、相変わらず「妄想する、眠る、ぼんやりする」の繰り返しなんです。そして、意味も理由も通用しない者がここにおったということをね、頭では未だにさっぱりわかってるんです。道元さんは、修行して仏にならないっていうことを、「修証一如」「証上の修」と、「修行と証（さと）り」と一緒だぜ、そのままだ、そのままとしてあるんだぜ」っていうことを言うわけです。

近代的自我

昔は、神様がおられてはじめて個（わたし）ということが成立し、個ということに意味を持たせてたわけです。だけど、今の僕たちは、神様という存在、上位概念がなくなった世界で生きています。そうした近代的自我は、自分で意味、理由を見出していくほかなくなつた。自分で意味、理由を探したら、お金とか能力とかが自分ということを指し示す価値になったわけです。

ゴリラの研究者がこんなことを言ってるんです。ゴリラっていうのは哺乳動物の中で唯一人間に近い行為をする。熊でもライオンでもオスつていうのは子どもを持ったメスにとつては最も危険な天敵なんです。子どもを食い殺してしまう存在だから。だけどオスゴリラは人間のように子どもの世話をするらしいんです。

そんなゴリラだけど、ご飯の時はそれぞれが勝手に葉っぱを食べてるっていうんです。研究者は言うわけです。「人間っていうのは不思議なものだ、わざわざご飯を食器で用意して、みんなが集まって会話しながらかじる」と。だけど、現代ではみんな忙しく、お母ちゃんはどこそこの仕事、お父ちゃんもどこそこの仕事、子どもは子どもで塾やらで、帰ってくるの晩の9時や10時だそうなんです。「こういうの、本当に進歩した社会って言うのか？ ご飯も一緒に食べられないことが裕福な社会なのか？」ということを研究者は問うわけです。

僕たちの持つてゐる自分とい

うこと、自分は自分なんだっていうふうな自分の「自分」ってことが一体何かと問うたらね、よく見えんわけです。自分自身にね、名前とか年齢とか、こんな仕事してましたとか、そんなこと自分で言うても通用しないっていうか、そんなの変でしょ。世間一般の中では通用させてるけど、自分自身には通用しない。「一体、自分って何なのか」って言われたら、ものすごく困る問題です。バンザイするより手がないんです。最終的には、「人間ですから」とか、「人間だもの」って言うほかないわけですが、じゃ、「人間って何ですか」って言われたら、「猫じゃないし、犬じゃないし……」ぐらいなんです。

矛盾する存在

ハイデガーという方は「存在するとは何か」ってことを生涯問うた人物です。「私とやるものがある」とあるということは、いつでも今このままだと完結している。と同時に、死があるということとは、未だ死んでいないから未了である、完結していない」。こ

の矛盾することが同時に起きているのが「存在」と言う。それは、私たちの頭では考え得ない「言葉を越えた世界」ということです。自分という存在そのものが、すでに自分で捉えることのできない存在としてある、自分の思いを破られた世界がこの自分自身の上で起きているぞって言うわけです。そして、その破られた世界があるってことがお念仏になっていくわけです。毎日9時間座するという中で本人は一生懸命、意味、理由を知らぬ間に探してて、どうしようもないって思っているけど、そういうこと関係なしに、言葉が破られた世界が「お前、このままあるぞ」ってことを示すのが坐禅であつたり、お念仏なわけです。

思い込みの世界

「毎日、なんで座ってるのか」って言われたら、たまたま曹洞宗の寺に生まれたからとしか言い様がない。「なんまんだぶつ」っていうことを全く知らない人がね、言えるかって言ったら、これ言えないんです。自分がひっくり返る理由

がないと、「なんまんだぶつ」とは言えない。だから、皆さんが「なんまんだぶつ」ってこの場で言えることはすごい縁をもらってるわけです。

だけど、同時に、見えなくさせてるものもあるんです。知らぬ間に、自分っていうことのふまえ方を、念仏することとそこに意味を見出しているわけです。お念仏することが自分の価値になってる、いいことになってるわけです。だから信心することが、思い込みの世界になってるわけです。

厄介ですね。知らぬ間に、念仏している自分がいいことになっていて、「自分が念仏する」わけです。どこかで大事なシーンがすり替わってるんです。自分っていうことが



感話 植山小夜子さん

通用しないもの、破られるものとしてあつたっていうことがお念仏であつて、その都度、自分に問うていくしか手がないわけです。

「親鸞さんの問い」を「自分の問い」のように勘違いしてるけれども、それは「親鸞さんの問い」です。それぞれがそれぞれの比べられないものいっぱい持つてゐるはずなんです。その中でお念仏することと、自分というものを問うていく、人間とは何なのかっていうことを問わざるを得ないものとしてここにおつたっていうことが、お念仏することの一番大事なシーンじゃないかと思ってるんです。

聞き書き担当者・感想

ちよつとした緊張も相まつてのどきどきと、話がどう展開していくのかというわくわくな気持ちで聞いていました。

言わんとしている内容とはちよつと、言いたいというその熱がこちらまでひしひしと伝わってきて、楽しかったです。

(藤谷風)

【第十一回】

お念仏のころを尋ねて

田畑 正久 先生

平野修先生は、「法蔵菩薩は私にかわって、私がしなければならぬ身と心の修行を全部してくれ、その功德を南



無阿弥陀仏に込めて私の前に差し出して下さっている。私のしなければならぬことは、その念仏を受け取るのか、受けとらないのか、だけである」と。それを聞いて、「へえー、あつけないなあー」と思いながら、同時に、「なるほど、そういうことだったのか!」と思いました。

沖繩で自分の病院の二階を聞法道場にされている志慶眞先生は、「煩惱に顔をつけたのが私です」と言われています。そのように、仏の智慧によって、救われようのない自分であることに気づく中で、「かたじけなくも、お念仏が届けられていた。お念仏させて頂きましょう」と、お念仏を受け取っていくのが浄土真宗の教えなんです。

【第十三回】

宗祖の問い

伊藤 元 先生

お釈迦さまの従兄弟で、いつもお釈迦さまの身近に



いた「多聞第二」の阿難が、お釈迦さまに、「世尊よ、善き友のあること、善き仲間のいること、善き人々に囲まれていることは、仏道修行の半分が達成されたことですね」と聞いたところ、お釈迦さまは、「阿難よ、そうではない。善き友をもつこと、善き仲間のいること、善き人々に取り巻かれていたことは、仏道修行の全てである」と答えられたという話があります。

親鸞聖人も同じですね。聖人は二十九歳の時、本願念仏の教えに生きておられる法然上人に出遇われた。その時、聞いた言葉が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」です。この言葉を聞いたことで、親鸞聖人のご一生が百八十度変わったんです。

【第十四回】

本願の名号

延塚 知道 先生

末期がんは痛いよ。

先生、「うー」と言いながら、「ナンマンダブツ：」言うから、「先生、薬じゃないから、



痛み止めぐらい、いいでしょう」と、いくら言っても、「痛いのもいただきものであります」と、言うことを聞かない。こんな人がおるのかと、身体が震えるぐらい感動しました。

「いいところも悪いところも、まるごと南無阿弥陀仏のいのちの中にあります。生きること

も死ぬことも、南無阿弥陀仏のいのちの中にあります」と、そして、「仏の教えによって、死んでいけるような者にまで育てられました。ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」と、自分の命に掌を合わせ、「嬉しかった。有り難かった」言うて、亡くなっていかれました。

【第十五回】

心理から真理へ

百々海 真 先生

「心理から真理へ」という講題にしました。私は仏法聴聞の要をこの言葉から教えられています。



聞法とは心の持ちようの問題でなく、すでに運ばれている道理の発見、身の事実への目覚めを賜り続けることと受けとめています。

林曉宇先生の書簡集に「どうにもならんというものが人間には大事なのです。それだけが「我」を破っていくのです」という言葉が載っています。「どうにもならんものが大事」なんて、人間の物差しに立てばやせ我慢としか聞こえません。ですからこれは林先生の上に聞こえた言葉であり、ご自身もきつとこの一言に育てられたのです。「我」が破られるとは、私たちのものの見方、モノサシが翻される一瞬でしょう。

【第十六回】

解放への祈り

俞漢子先生

人類誕生の時から人間の
中にある、美しいものを見たら



感動する、美しい月を見たら自然に手を合わす、
そういうものに気づかせてくれるものが宗教で
はないでしょうか。すでに私たちに有るもの、
願われているもの、そういうものに気づいたら、
仏教は明るい世界観、生きる力になりました。

私はね、いろんな形で親鸞聖人に出遇った喜
びを伝えたい。「親鸞聖人の言葉を聞いて、私
は蘇生しました」と。人間はね、過去に戻って
生き直すことは出来ない。でもね、生き方を変
えることはできる。梶原敬一さんは「親鸞が言
えなかったことを、今生きている私たちが言う」
と教えてくれたことがあります。私たちは親鸞
聖人の未来を生きる門徒です。

【第十七回】

生活の中で出遇う親鸞さまの教え

牧野桂一先生

鈴木大拙先生は、行を
「Living (生活)」
と英訳しておられます。真
宗の行は生活なんです。朝起
きて眠るまで、箸の上げ下ろしま
で含めた全体に真宗の教えがあるのです。そし



て赤ちゃんにも年寄りにも流れていて、童謡や
童話にも仏様の願いが込められています。私は
わたしであるがままに「天上天下唯我独尊」。
誰一人として代わりようのない命を生きている。
その命を本当に温かい眼差しで見守るお母さん、
お父さんの眼、家族の眼、仏さんの眼が大切で
す。誰も見捨てない撰取不捨の眼で一人一人の
いのちが見つめられていることを伝えていくこ
とが、今ほど求められている時はありません。

【第十八回】

真宗遇いがたし

荒木半次先生

木村無相さんが「念仏が
息をする」と言っておられ
ます。



一息 一息 如来の息
我は仏に非ざれど
如来は我に息したもう

この詩の背景には、曾我先生の「如来、我とな
りて我を救いたもう」という言葉があるのでしょ
うが、「如来、念仏の息となりて我を生かした
もう」、念仏は息やと実感しました。

念仏が息であるということ、浅原才市さん
にもこんな詩があります。

出る息が南無
引く息が阿弥陀仏
出入りの息こそうれし なむあみだぶつ
息の間もなむあみだぶつ

「出る息」つまり吐き出す息は自我ですよ。自
我を吐き出すと、おのずから自分の中に吸い込
まれてくるのが阿弥陀仏です。本当に素晴らし
い詩だと思います。

児玉先生も「如来の本願が私のいのちとなっ
たその証、その徴が南無阿弥陀仏。南無阿弥陀
仏はだから本願の呼吸です」と言われています。

【第十九回】

南無阿弥陀仏のみぞまこと

加来雄之先生

仏教は理屈として何に
も難しいことはありません。
「今、ここに、この
ような自分として、さまざ
まな他者とともにある」、



このわが身の事実を正しく受けとめることが仏
教の根本です。ところが私たちは思いでこの身
の事実を解釈して生きています。これを仏教で
は迷いという。この迷いの心でみずから傷つ
け他を傷つける世界をつくりあげています。自
分に与えられた身を正しく受けとめること、そ
れ以外に仏教の課題はない。「あなたの身の事
実、これだけがあなたが帰って行く大地です。
思いをどれだけ積み重ねても身の事実には帰れ
ませんよ。身の事実からの呼びかけ、それをき
ちんと聞いて下さい」この呼びかけが南無阿弥
陀仏です。だから南無阿弥陀仏が私たちにとっ
てもっとも大事な言葉なんです。

恵信尼公七百五十回御遠忌法要次第

二〇一九年十一月二十三日

10 .. 00 ~ 10 .. 45

・ 献灯・献華・献香

・ 表白（坊守）

・ 勤行 …… 音楽法要（コールハイマート）

11 .. 00 ~ 12 .. 00

・ 記念法話

講師 渡辺愛子先生

講題 「親鸞聖人と共に歩んだ恵信尼さま
―在家仏教をひらく―」

12 .. 00 ~ 13 .. 15

・ お斎

*昼食休憩中 …… お抹茶の接待

（中園れい子社中）

13 .. 30 ~ 14 .. 00

・ かはづの会有志による踊り「御遠忌慶讃歌」

14 .. 15 ~ 15 .. 30 （記念イベント）

・ 薩摩琵琶演奏

「花こぶし―恵信尼公を憶う―」

作詞Ⅱ 渡辺愛子

作曲・演奏Ⅱ 桜井亜木子

「敦盛」平家物語より

15 .. 30 閉会

親鸞聖人七百五十回御遠忌法要次第

二〇一九年十一月二十四日

10 .. 00 ~ 11 .. 00

・ 献灯・献華・献香

・ 伽陀 *起立散華

・ 表白（住職）

・ 勤行 正信偈・念仏・和讃

宇佐組法中 *雅楽あり

11 .. 00 ~ 12 .. 00

・ 記念法話

講師 狐野秀存先生（大谷専修学院長）

講題 「ただびととなりて祖聖そしやうに続かん」

12 .. 00 ~ 13 .. 00

・ お斎

13 .. 15 ~ 14 .. 00 （記念イベント）

・ 一人芝居「妙好人むつれじまのおかる軽」

14 .. 15 ~ 15 .. 15

・ 記念式典

・ 講話「勝福寺の歴史」…… 渡辺浩晃氏

・ 感謝状

15 .. 15 ~ 餅まき

15 .. 30 閉会

響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人・恵信尼公 七百五十回御遠忌予算

収入の部

※単位 円

勝福寺一般会計より	2,	0	0	0,	0	0	0
永代経御懇志積立金より	3,	6	0	0,	0	0	0
御遠忌 御懇志	2,	0	0	0,	0	0	0
お待ち受け聞法会会費	3	5	0,	0	0	0	0
『愚禿釋親鸞…』売上金	1	5	0,	0	0	0	0
御仏前	1	0	0,	0	0	0	0
合計	8,	2	0	0,	0	0	0

支出の部

内陣莊嚴修復費	3,	6	0	0,	0	0	0
御遠忌法要費	1,	0	7	5,	0	0	0
お待ち受け聞法会	1,	0	0	0,	0	0	0
テーマ短冊作成費	1	1	8,	3	3	9	0
『愚禿釋親鸞…』製本代	4	7	4,	1	2	0	0
『響流山勝福寺―その歴史と歩み―』製本代	8	0	0,	0	0	0	0
『お待ち受け聞法会法話集』製本代	8	0	0,	0	0	0	0
『テーマ作品集』作成費	1	0	0,	0	0	0	0
通信印刷費	1	8	2,	5	4	1	0
その他	1	0	0,	0	0	0	0
合計	8,	2	0	0,	0	0	0